大学入試
実戦国語
古文
和歌・俳文・近世小説

見本

和歌・俳文・近世小説

基礎問題

1

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（西南学院大・神・法・文）

折ふしは正月七日の夜、近所の男子を＊藤市方へ長者に成りやうの1指南を頼むとて、2遣はしける。座敷に灯火輝かせ、娘を付け置き、「3露地の戸の鳴る時知らせ」と申し置きしに、この娘、しほらしく4かしこまりて、5灯心を一筋にして、物申の声する時、6元の如くにして、勝手に入りける。三人の客、座に着く時、台所に摺鉢の音響き渡れば、客、耳を喜ばせ、これを推して、「皮鯨の吸物」と言へば、「7いやいや、初めてなれば、雑煮なるべし」と言ふ。又一人は、よく考へて、「煮麺」と落ち付けける。8必ず言ふ事にして、をかし。

藤市出でて、三人に世渡りの大事を物語りして聞かせける。一人申せしは、「今日の七草といふ謂れは、いかなる事ぞ」と尋ねける。「あれは神代の始末始め、9増水といふ事を10知らせ給ふ」。又一人、「掛鯛を六月迄荒神の前に置きけるは」と、尋ぬ。「あれは、朝夕に肴を喰はずに、これを見て、喰うた心せよ、といふ事なり」。又、太箸を取る由来を問ひける。「あれは、汚れし時白げて、一［A］にて一年中あるやうに、これも神代の二［B］を表すなり。11よくよく万事に気を付け給へ。さて、宵から今まで、12おのおの咄し給へば、もはや夜食の出づべき所なり。出ださぬが長者に成る心なり。最前の摺鉢の音は、大福帳の上紙に引く糊を摺らした」と13言はれし。

＊藤市＝京都室町の分限者。

（日本永代蔵）

解答・解説⇩別冊126ページ

問一　傍線部1・3・4の本文中の意味は何か。次のイ～ニの中から最も適当なものをそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

1「指南」　イ 教師　ロ 指導　ハ 疵護　ニ 稽古

3「露地」　イ 道筋　ロ 裏通り　ハ 庭の通路　ニ 茶室の庭

4「かしこまりて」　イ 承知して　ロ 正座して　ハ 恐縮して　ニ お辞儀をして

問二　空欄AおよびBに当てはまる接尾語をそれぞれ次のイ～ホから一つずつ選び、記号で答えよ。

A　イ　揃（そろい）　ロ　組　ハ　本　ニ　膳（ぜん）　ホ　挺（ちょう）

B　イ　基　ロ　方　ハ　柱　ニ　体　ホ　社

問三　傍線部**8**「必ず言ふ事にして、をかし」とは、どういう意味か。次のイ～ニの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

イ　摺鉢の音がすると、味噌で味付けするものばかりを想像するからおかしい。

ロ　こんなときにはごちそうがでるものだと決めてかかり、そんな話をするからおかしい。

ハ　皮鯨・雑煮・煮麺のようなものをごちそうだと思って、喜んで期待しているからおかしい。

ニ　あれやこれや想像してみても、最後にはだれもが煮麺だと考えてしまうからおかしい。

問四　傍線部**7**・**11**・**12**の品詞は何か。該当するものを次のイ～ホの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

イ　名詞　ロ　副詞　ハ　連体詞　ニ　接続詞　ホ　感動詞

問五　傍線部**2**・**10**・**13**の主語は何か。該当するものを次のイ～ホの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

イ　藤市　ロ　娘　ハ　親　ニ　神　ホ　客

問六　傍線部**5**「灯心を一筋にし」た理由は何か。本文中の一語（二字）を抜き出して答えよ。

問七　傍線部**6**「元の如くにし」たとは、どのようにしたのか。本文中の言葉（二文節）を抜き出して答えよ。

問八　傍線部**9**「増水」は当て字である。正しい漢字を楷書で記せ。

問九　本文中から落語でいう「落ち」に当たる箇所を抜き出し、その初めと終わりを五字ずつ記せ。

問十　『日本永代蔵』の作者の姓名を漢字で記せ。

2

次の文章は、横井也有の『鶉衣』に収める「歎老の辞」の一節である。問題文をよく読んで、後の問いに答えよ。

（成蹊大・経済）　解答・解説⇩別冊128ページ

1芭蕉翁は五十一にて世を去り給ひ、作文に名を得し難波の西鶴も、五十二にて一期を終はり、見過ごしにけり末二年の辞世を残せり。わが虚弱多病なる、それらの年もかぞへこして、今年は五十三の秋も立ちａぬ。＊為頼の中納言の、若き人々の逃げかくれければ、2いづくにか身をばよせましとよみて歎かれけんも、やや思ひしる身とはなれりけり。さればうき世に立ち交らんとすれば、3なきが多くもなりゆきて、＊松も昔の友にはあらず。

たま〳〵一座につらなりて、若き人々にもいやがられじと、心かろくうちふるまへども、耳うとくなれば話も間違ひ、たとへ聞こゆるささやきも、当時のはやり言葉をしらねば、それは何事何ゆゑぞと、根問ひ葉問ひを4むつかしがりて、＊枕相撲も拳酒も、さわぎは次へ遠ざかれば、奥の間にただ一人、火燵布団のｂ島守となりて、おむかひがまゐりましたと、とはぬに告ぐる人にもかたじけなしと礼はいへども、何のかたじけなき事かあらむ。＊六十の髭を墨にそめて、北国の軍にむかひ、五十の顔におしろいして、＊三ケの津の舞台にまじはるも、5いづれか老いを歎かずやある。

歌も浄瑠璃もおとし話も、昔は今のにまさりしものをと、老人ごとに覚えたるは、おのが心の愚なり。物は次第に面白けれども、今のは［A］が面白からぬにて、昔は［B］が面白かりしなり。しかれば、人にもうとまれず、我も心のたのしむべき身のおき所もやと思ひめぐらすに、わが身の老いを忘れざれば、しばらくも心たのしまず。わが身の老いを忘るれば、例の人にはいやがられて、あるは6にげなき酒色の上に、あやまちをも取り出でん。されば［C］。二つの境まことに得がたしや。

＊為頼の中納言の～歎かれけんも＝藤原為頼がある日参内して、懇意な人のもとに寄ったところ、なぜか若い殿上人たちが逃げたので、為頼は「いづくにか身をばよせまし世の中に老いをいとはぬ人しなければ」という歌を詠んだという。　松も昔の友にはあらず＝藤原興風の「たれをかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」（『古今集』）の歌による。　枕相撲も拳酒も＝枕相撲は、握りこぶしの上に枕を立てて突き合い、勝ち負けを争う遊戯。拳酒は、じゃんけんをして、負けた者が罰として酒を飲むという遊戯。　六十の髭を墨にそめて、北国の軍にむかひ＝平家の武将斎藤実盛は、六十余歳の時、白くなった髭や髪を黒く染めて北国での戦いに臨んだという。　三ケの津＝京都・大阪・江戸という、江戸時代における三つの大都市をさす。

問一　傍線部1において、作者はなぜ芭蕉に対して敬語を用い、西鶴に対しては敬語を用いていないのか。最も適当と思われる理由を次のうちから一つ選び、記号で答えよ。

イ　芭蕉の方が西鶴より先に生まれ、いわば先輩にあたるから。
ロ　芭蕉は武士階級の出身だが、西鶴は町人だったから。
ハ　当時の世間では、西鶴は文学者として評価されていなかったから。
ニ　作者は俳諧をたしなみ、西鶴よりも芭蕉の方により強い敬意をいだいていたから。

問二　波線部aの「ぬ」と文法的に異なる意味のものを次のうちから二つ選び、記号で答えよ。

イ　秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
ロ　わたの原八十島かけてこぎいでぬと人にはつげよあまの釣舟
ハ　年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし
ニ　秋風にほころびぬらし藤ばかまつづりさせてふきりぎりす鳴く
ホ　わが身こそあらぬかとのみたどらるれとふべき人に忘られしより
ヘ　待つ宵にふけゆく鐘の声聞けばあかぬわかれの鳥はものかは

問三　波線部b「島守」とはどのような様子の比喩か。次のうちから最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

イ　しっかりかじりついているさま　　ロ　なすこともなくぽつねんとしているさま
ハ　若い人のために火の番をしているさま　　ニ　体をじゅうぶん動かせないさま
ホ　他の人が入るのを邪魔しているさま

問四　傍線部2～6はどういう意味か。次のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

2　いづくにか身をばよせまし
イ　若人たちはどこに身を寄せるつもりだろう　　ロ　どこにもわが身を寄せることなどすまい
ハ　いったいどこにわが身を寄せよう　　ニ　若人たちはどこにでも身を寄せられよう

3　なきが多くもなりゆきて
イ　泣きをみることが多くなっていって　　ロ　死んでしまった人が多くなっていって
ハ　まもなく死ぬという可能性が強くなっていって　　ニ　涙もろく泣きがちになっていって

4　むつかしがりて

イ　うるさがって　　ロ　難問だと思って　　ハ　すねて　　ニ　返答に窮して

5　いづれか老いを歎かずやある

イ　いつかは老化を嘆くようになるのであろうか　　ロ　どちらかは老いを嘆かないのであろう

ハ　いったいどこに老いを嘆かない土地があろうか　　ニ　いったいだれが老化を嘆かないことがあろうか

6　にげなき

イ　またとない　　ロ　ふさわしくない　　ハ　度を越した　　ニ　避けられない

問五　空欄A・Bには、それぞれどのような言葉が入ればよいか。正しい組み合わせを次のうちから一つ選び、記号で答えよ。

イ〔A　人　B　我〕　　ロ〔A　我　B　人〕　　ハ〔A　我　B　皆〕

ニ〔A　皆　B　我〕　　ホ〔A　我　B　我〕　　ヘ〔A　人　B　皆〕

ト〔A　皆　B　人〕　　チ〔A　皆　B　皆〕　　リ〔A　人　B　人〕

問六　空欄Cには、どのような文が入ればよいか。次のうちから最も適当と思われるものを一つ選び、記号で答えよ。

イ　老いは忘るべし。また老いは忘るべからず　　ロ　若きには留まりがたく、なほ老いは避けがたし

ハ　長く世にあれば、次第に面白きこと、憂きこと多し　　ニ　老いと若きと常にうち交じりて友たることかたし

ホ　若き日は短く、老いたる時は長し

問七　次の**イ**～**チ**は、芭蕉と西鶴が著作したか、あるいは関与した作品を組み合わせたものである。その中に二つだけ芭蕉と西鶴には無縁の作品のまじった組み合わせがある。その記号を二つ答えよ。

イ　虚栗・懐硯　　ロ　万の文反古・猿蓑　　ハ　奥の細道・浮世物語

ニ　世間胸算用・笈の小文　　ホ　更科紀行・日本永代蔵　　ヘ　東関紀行・好色五人女

ト　武家義理物語・炭俵　　チ　好色一代男・野ざらし紀行

標準問題

3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（二松学舎大・文）

解答・解説⇩別冊130ページ

八番　款冬（やまぶき）　左勝　1順

A　春がすみ井手のかはなみたちかへりみてこそゆかめやまぶきの花

右　はかかれる

B　ひとへづつやへ山ぶきは2ひらけなむほどへてにほふはなとたのまむ

左歌、いとをかし。さることなりと聞こゆ。右歌、八重山吹の一重づつひらけむは、一重なる山吹にて［A］はあらめ。心あるに似たれども、八重咲かずは本意なくやあらむ。又、下の句のはて、上の句のはてと、同じ文字あり。仍以（ッテ）左為（ッテヲスト）勝。

藤

九番　左　朝忠

C　むらさきににほふふぢなみうちはへてまつにぞちよのいろ

右勝　兼盛

D　われゆきていろみるばかり住吉の3きしのふぢなみをりなつくしそ

左歌、水なくて藤波といふ詞、古き歌に、をりをりあり。されど、4たづぬる人なければ、とどまれるなるべし。歌合にはいかがあらむ。言に寄せぬはあるまじ。いはれなし。なほ、水・池・岸などぞ寄すべかりける。歌がらは、清げなり。右歌、5おなじ波あるに、岸に寄せたれば、たよりあり。かうぞ古きにもある。藤波とおしなべていふ言にはあらず。御気色も、さやうに［B］見ゆる。少臣問二源大納言一云（ウテ）（ニ）（ハク）、「尤難也（ダキ）。暫く持に疑レ之（フカヲ）」、右6方人申云（シテハク）、「左歌の藤波、水に寄らず。如何」と愁申（ヒス）。事理可然（シルレ）。仍以右為（ッテヲスト）勝。

（天徳四年三月三十日内裏歌合）

問一　傍線部**1**の源順が、他の仲間と撰集した勅撰和歌集の名を漢字で答えよ。

問二　傍線部**2**「ひらけなむ」の文法について、次の中から正しいものを選び、記号で答えよ。

イ　四段動詞＋係助詞　　ロ　下二段動詞＋係助詞　　ハ　四段動詞＋終助詞

ニ　下二段動詞＋終助詞　　ホ　四段動詞＋完了の助動詞＋推量の助動詞

ヘ　下二段動詞＋完了の助動詞＋推量の助動詞

問三　空欄A・Bに、それぞれ適当な係助詞を入れよ。

問四　八番で、右歌が負けた理由を、次の中から二つ選び、記号で答えよ。

イ　一重ずつゆっくり咲いていると、時間がかかりすぎて、待ちくたびれるから。

ロ　左歌に歌枕「井手」が詠みこまれているが、右歌には歌枕が入っていないから。

ハ　八重山吹の花の美しさの本質と、上句の内容が適合していないから。

ニ　上句の頭「ひとへ」の「ひ」と、下句の頭「ほど」の「ほ」が、同じハ行の音になっているから。

ホ　上句の末と下句の末が、同じ音であるから。

ヘ　上句に「山ぶきは」と、下句に「にほふは」と、同じ「は」があるから。

問五　傍線部**3**を、現代語訳せよ。

問六　傍線部**4**の現代語訳として、最も適切なものを選び、記号で答えよ。

イ　遊びに行ったところの人がいなかったので、その場に留まったのだろう。

ロ　前例をさがし求める人がいなかったので、用いなくなったのだろう。

ハ　訪れる人がいなかったので、寂しくそこに留まったのだろう。

ニ　遊びに行く人がいなかったので、中止になったのだろう。

ホ　歌のできばえを聞く人がいなかったので、捨て置いたのだろう。

問七　九番歌の勝敗についての判詞と、内容の違うもの二つを選び、記号で答えよ。

イ　水・池・岸などがないから、左歌の負けとしましょう。

ロ　左歌の調子が、美しくないので、負けにしましょう。

ハ　判断が難しいから、引き分けとしましょう。

ニ　藤と松の取り合わせが悪いから、左歌の負けとしましょう。

ホ　天皇のご意向も、右歌にあるように思われますので、右歌の勝ちとしましょう。

ヘ　右の応援の人の指摘のとおりだから、右歌の勝ちとしましょう。

問八　傍線部**5**は、Dの和歌のある修辞を指摘している。この修辞はなんというものか。漢字で答えよ

問九　傍線部**6**「方人」の読み方を、平仮名で記せ。

4

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（立教大・社）

昔、丹後の国普甲寺といふ所に深く浄土をねがふ上人ありけり。年の始は世間祝ひごとしてさざめけば、我もせんとて大卅日の夜、ひとりつかふ小法師に手紙したため渡して、「翌日の暁にしかじかせよ」と、アきといひをしへて、本堂へaとまりにやりぬ。小法師は元日の旦、いまだ隅々は小闇きに、初烏のイ声とおなじく、がばと起きて、教へのごとく表門を丁々と敲けば、内より「いづこより」と問ふ時、「西方弥陀仏より年始の使僧に候ふ」とb答ふるよりはやく、上人裸足にてをどり出て、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座に請じて、きのふの手紙をとりてうや〳〵しくcいただきて読みていはく、「1其の世界は衆苦充満に候ふ(1)間、はやく2吾が国に来るべし。＊聖衆出むかひしてまち入り候ふ」と、よみ終はりて「おおおお」と泣かれけるとかや。

此の上人、3みづから工み拵へたる悲しみに、みづからなげきつつ、初春の浄衣を絞りて、しただる泪を見て祝ふとは、物に狂ふさま(2)ながら、俗人に対して無常を演ぶるを＊礼とすると聞く(3)からに、仏門においては、いはひの骨張なるべけれ。それとはいささか替はりて、おのれらは俗塵に埋もれて世渡る境界ながら、＊鶴亀にたぐへての祝尽しも、＊厄払ひの口上めきてそらぞらしく思ふからに、から風の吹けばとぶ4屑家はくづ家のあるべきやうに、門松立てず、煤はかず、雪の山路の曲り形に、ことしの春もあなた任せになんむかへける。

目出度さも＊ちう位なりおらが春　一茶

＊聖衆＝極楽浄土にいる諸菩薩。特に念仏行者が命終のとき来迎するという二十五菩薩のこと。　礼＝礼儀。ここでは役目の意。　鶴亀にたぐへての祝尽し＝鶴亀の長寿になぞらえ、めでたい言葉を並べて祝うこと。　厄払ひ＝大晦日または節分の夜、災難よけの言葉を述べ、米銭を乞い歩く者。　ちう位＝信州方言では、いい加減、あやふや、あいまい、といった意に用いる。

（おらが春）

解答・解説⇨別冊132ページ

問一　傍線部**ア**・**イ**を、句読点ともア**ア**は十五字以内、**イ**は十字以内で現代語訳せよ。

問二　傍線部a～cの主語に当たるものは、「上人」あるいは「小法師」のいずれかである。それぞれについて、「上人」の場合は1、「小法師」の場合は2として、番号で答えよ。

問三　波線部**1**・**2**について、それぞれどこを指しているか、記せ。

問四　傍線部(1)～(3)は、どんな接続の仕方をしているか。それぞれについて、順接の場合は1、逆接の場合は2として、番号で

答えよ。

問五 波線部**3**「みづから工み拵へたる」とはどういうことか。句読点とも二十字以内で記せ。

問六 波線部**4**「屑家はくづ家のあるべきやうに」を、句読点とも二十字以内で解釈せよ。

問七 「目出度さも」の句について、この句の解説として最も適当なもの一つを次の**イ**～**ホ**の中から選び、記号で答えよ。

イ 世間並みに新年を迎えることができた作者の中流意識を、喜びをもって表現した句である。

ロ 世間並みとはいかずとも、どうやらこうやら新年を迎えることができた喜びを、斜(しゃ)に構えて表現した句である。

ハ 世間並みに新年を迎えることができない境遇から、その恨み辛(つら)みを、激越に表現した句である。

ニ 世間並みに新年を迎えることができない境遇をおのれの運命と悟り切った、清澄な心境を吐露した句である。

ホ 宗教心もなく、俗塵にまみれたまま新年を迎えるおのれの醜い姿を、深い反省を込めて詠んだ句である。

問八 次の**イ**～**ホ**の中から、一茶と同時期に活躍した文学者を一人選び、記号で答えよ。

イ 井原西鶴　**ロ** 近松門左衛門　**ハ** 滝沢馬琴　**ニ** 向井去来　**ホ** 契沖

発展問題

5

次の文章は、死の床についている芭蕉について、弟子の各務支考が書いたものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

（上智大・文）　解答・解説⇩別冊134ページ

この夜、深更（しんかう）におよびて、介抱に侍りける呑舟（どんしう）を召されて、硯（すずり）の音のからからと聞こえければ、いかなる1消息にやと思ふに、

病中吟

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる　翁

その後、支考を召して、「『なほかけめぐる夢心』といふ句作りあり。いづれをか」と申されしに、2その五文字はいかに承り候はんと申せば、いと3むつかしきことに侍らんと思ひて、「この句、なにか劣り候はん」と答へけるなり。4いかなる不思議の五文字が侍らん。5いまはほいなし。

みづから申されけるは、「はた生死の転変を前に置きながら、6＊発句すべきわざにもあらねど、よのつね7この道を心にこめて、年もやや半百に過ぎたれば、8いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の声におどろく。これを仏の妄執と戒め給へる、ただちにいまの身の上に覚え侍るなり。この後はただ生前の俳諧を忘れむとのみ思ふは」と、かへすがへす悔やみ申されしなり。

＊発句＝俳句。

（笈日記）

問一　傍線部1の意味は何か、次のうちから一つを選べ。

イ　手習　　ロ　発句　　ハ　作品　　ニ　辞世句　　ホ　手紙

問二　傍線部2の「その五文字はいかに承り候はん」というのはどういうことを問題としているのか、次のうちから一つ選べ。

イ　「なほかけめぐる夢心」では五文字たりないが、その上につく五文字は何か。

ロ　「なほかけめぐる夢心」というのは「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」の別案だから、最初の五文字は当然「旅に病んで」のはずで、その五文字の持つ意味の重要さ。

ハ　「なほかけめぐる夢心」の中の「ゆめごころ」という五文字が持つ真の意味。

ニ　「なほかけめぐる夢心」の上につく五文字は「旅に病んで」のはずだが、それでは季語がなくなるので、そういう五文字を

わざわざつけた理由。

ホ　「なほかけめぐる夢心」と「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」とに共通する「かけめぐる」という五文字がいまの芭蕉にとって大切と思われるが、その五文字の奥にある深い意味。

問三　傍線部**3**の意味としてはどれがいちばん近いか、次のうちから一つ選べ。

イ　（芭蕉に）面倒をかけることになろう。　ロ　（自分にとって）理解できない作品になろう。

ハ　（芭蕉に）解決不能な課題をつきつけることになろう。　ニ　（自分にとって）厄介な問題を抱え込むことになろう。

ホ　（芭蕉と自分との間が）悪い関係になってしまうだろう。

問四　傍線部**4**の意味としてはどれがいちばん近いか、次のうちから一つ選べ。

イ　いかなる奇妙な五文字もあるはずがない。　ロ　いかなる優れた五文字もあり得ないのだ。

ハ　いかなる玄妙な五文字があったのだろうか。　ニ　いかなる理解し難い五文字があったのだろうか。

ホ　いかなる謎の五文字が残されているのだろうか。

問五　傍線部**5**の言葉が表現したいのはどのようなことか、次のうちからいちばん近いと思われるものを一つ選べ。

イ　芭蕉が死んだいま、本当の俳人はもういないと嘆く気持ち。

ロ　芭蕉が死んだいまとなっては、もう知ることができないと残念がる気持ち。

ハ　芭蕉が死んだいまは、もう優れた句が生まれることはないと諦める気持ち。

ニ　芭蕉が死んだいま、もうこんなことはどうでもよいと自分に言い聞かせる気持ち。

ホ　芭蕉が死んだいまの世の中では、俳句を作る上で不本意なことが多いと警告する気持ち。

問六　傍線部**6**の言葉にはどのような意味がこめられているか、次のうちからいちばん近いものを一つ選べ。

イ　句を作る技術の問題ではないけれど。　ロ　句を作る技術が自分にはないのだけれど。

ハ　句にしなければならない理由もないけれど。　ニ　句など作っている場合ではないのだけれど。

ホ　句を自分からすすんで作っているのではないけれど。

問七　傍線部**7**の「この道」とはなにか、次のうちから一つ選べ。

イ　書の道　ロ　仏の道　ハ　俳諧の道　ニ　人として行うべき道　ホ　旅による修行の道

問八　傍線部8はどういうことのたとえとして言っているのか、次のうちから一つ選べ。

イ　日夜俳諧に心を砕く。
ロ　常に旅をして心を修める。
ハ　毎日毎日を仏の修行に使う。
ニ　俳諧を忘れて、旅を楽しむ。
ホ　俗世間を去って、清閑な生活を楽しむ。

問九　次のイ～ヌの文のうち、本文と内容が一致するものをAとし、一致しないものをBとして答えよ。

イ　芭蕉は死の床にあっても俳諧のことが忘れられない。
ロ　俳諧のことが忘れられないのは仏の言う妄執であって、いけないことだと、芭蕉は思っている。
ハ　芭蕉は常に俳諧のことだけを考えつづけてきた。
ニ　いまになっても俳諧に心を煩わせているのは残念なことだと、芭蕉は考えている。
ホ　死んでから後は俳諧のことはすべて忘れたいと、芭蕉は思っている。
ヘ　俳諧に熱中した自分の人生は素晴らしいものであったと、芭蕉は思っている。
ト　芭蕉は死ぬまで俳諧に携わったことを誇りにしている。
チ　俳諧修行はそのまま仏道修行にも通じると、芭蕉は考えている。
リ　芭蕉はいつも俳諧のことを忘れようと努力してきた。
ヌ　仏の道に比べれば、俳諧は芭蕉にとってどうでもよいことであった。